

Let's Know Hiroshima Castle.

しろや！ 広島城



NO. 22



写真 広島市文化財団文化財課提供

ひろしま歴史の小耳 18

広島城築城以前の広島湾の姿

広島城は16世紀の終わり頃に築城されますが、それ以前の広島湾頭の姿はどんな様子だったのでしょうか。

今は完全に陸地化している比治山(広島市南区)もかつては完全な島でしたが、その南端部分の標高10mの場所に縄文時代後期から晩期にかけて(約3,000～2,500年前)の県史跡比治山貝塚があります。貝塚というのは今日でいうゴミ捨て場で、当時の人々が食料とした魚介類や獣の食べカス、壊れた土器や石器などの生活道具を場所を決めて捨てていました。こうしたゴミは、当然深い部分にあるものほど古いのですが、そこから見つかる貝の種類を詳しく調べてみると、興味深いことが分かります。まず、縄文時代後期にあたる下層から出てきた貝の種類は、ハマグリやカキ・アサリが中心です。ハマグリ・アサリは濃い塩分濃度の砂泥に生息する長型のものとされることから、比治山が広島湾の沖合に浮かぶ島であったことが分ります。一方、縄

文時代晩期の上層になるとアサリが減少し、代わって淡水が流れ込むきれいな砂泥に生息するハイガイが含まれるようになることから、この頃には太田川の三角州がそろそろ形成され始めた様子うかがえます。

こうしたことは縄文時代晩期から弥生時代中期(約2,500～2,000年前)の遺跡である中山貝塚(広島市東区)では、もっと顕著になります。縄文時代晩期の貝の構成は比治山とほぼ同じですが、弥生時代の貝層になると淡水産のヤマトシジミやオオタニシが含まれることからこの時期太田川下流域では「弥生の小海退」という現象の影響もあって上流から運ばれた土砂によってできた砂州や自然堤防によってかなり速いペースで低湿地化が進んだようです。

さて次の古墳時代に入ると、この時期台頭してきた有力な豪族によって、広島湾の深部を取り巻く丘陵には弥生時代後期(約1,800年前)の遺跡にほぼ重なるようにして、前期古墳(4～



築城前の五ヶ村の様子（想像図）

は「安摩庄五箇浦」の名が見えますが、これが広島の前身である「五ヶ」の初出という見解もあります。そしてこの「五ヶ」は毛利元就の頃には「五ヶ村」と呼ばれます。洪水の害を受けやすく不安定な地盤であったため、元就やその孫の輝元は堤を築き、開拓と治水を積極的に進めます。

このように毛利氏は早くから「五ヶ」の軍事上、政治経済上の重要性を感じとっていたようで、天正17年(1589)輝元は、いよいよ広島城築城に取りかかるのです。

(石田)

学芸員の一口コラム

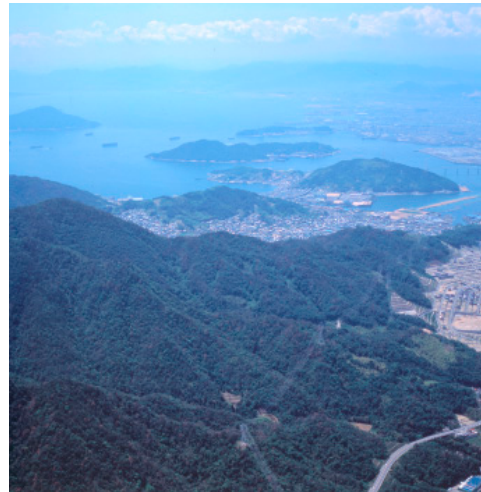
戦国時代の文芸から「山城」を考える

戦国時代には“連歌”という文芸が流行し、中央の著名な連歌師が地方を訪れた際には、地方の武将達は彼らを招いて交流を図りました。ここ安芸の国では、戦国時代の永正13年(1516)頃、宗碩そうせきという連歌師が訪れ、矢野(安芸区矢野)の国人領主・野間氏が興行した連歌会に招かれています。今回は、この連歌会の冒頭で宗碩が詠んだ句(発句)が、戦国時代の山城を考える上で実に興味深いので紹介したいと思います。宗碩そうせきの作品集「月村抜句」によると、野間氏の連歌会での発句は次のように記されています。

芸州野間掃部頭山城にて 浦風や 五月雨はこぶ 嶺の雲

最初の「芸州野間掃部頭山城にて」とは連歌会の会場のことで、これにより「野間掃部頭」(興勝おきかつか)の「山城」に連歌会を開くことが出来る空間があったことがうかがえます。一般的に連歌会は屋内で行われ、出席者も数人から十数人に及ぶことがあり、武士の居館で興行される場合には、会所と呼ばれる会合や遊興のための建物が会場に充てられました。したがって、野間氏の山城にも会所、あるいは会所としての機能を持つ建物があつたと考えられます。

ここで改めて宗碩の発句を読むと、海風によって雨雲が山々の頂をかすめつつ流れている、そんな光景がまぶたに浮かんできます。また、五月雨という季語からは、連歌会興行時には雨が降っていたと想像されます。まさに広島湾を眼下に望む山城の中の建物(会所、あるいは会所的な空間)で詠んだ句と言えます。連歌会の会場となった野間氏の「山城」に関しては、具体的な名称が記されていませんが、この場合、広島湾東岸にそびえる絵下山系の標高476mの尾根上に位置する発喜城(矢野城)と考えるのが妥当ではないでしょうか。



上空からみた矢野城跡(広島市市民局写真提供)

戦国時代の山城については、険しい山の上に合戦のためだけに築かれた砦といった武骨な姿を想像されるかもしれませんが、会所としての機能を持つ建物もあり、雅びやかな連歌会が開かれるなど、決して戦いのためだけの施設ではありませんでした。宗碩が野間氏の「山城」で詠んだ句は、地方武士における連歌の普及を示すとともに、山城内の空間構成を考える良い事例と言えます。

(篠原)

日清戦争を伝えた人たち

「城下町こぼれ話」とはいいながら、今回は明治時代になってからの広島のお話をしたいと思います。

明治時代に広島が全国的にクローズアップされた出来事といえば明治27～28年(1894-1895)に行われた日清戦争です。日清戦争では明治天皇が広島へ来られ、広島城内に大本営が設置されるとともに、広島で帝国議会(現在の国会)が開かれるなど、広島は一時的に日本の首都のような状態になりました。また、戦場に向かう兵隊さんたちが全国から広島に集まり、宇品から船で戦場に向かって行きました。

ところで広島から戦場に向かったのは兵隊さんだけではありません。日清戦争は明治維新後の日本が経験するはじめての外国との大きな戦争ということで、国民の関心も高く、戦争のようすを報道しようというたくさんの新聞記者や写真家が戦場に向かいました。

短歌や俳句で知られる正岡子規は、日本新聞社の記者として広島を訪れ、宇品から船で遼東半島へ渡っています。子規が広島に滞在している間に詠んだ「鶯の口のさきなり三万戸」の句碑が比治山に、「行かば我れ筆の花散る処まで」の句碑が宇品の千田廟公園にあり、広島における子規の足跡を今日でも見ることができます。

また、地元の中国新聞社から派遣された下山熊喜記者は明治27年9月15日の平壤での戦い

で銃弾を受けて死亡し、従軍記者としてわが国最初の犠牲者となりました。

写真家では、もと石州(現在の島根県)津和野藩主亀井家の13代目にあたる亀井^{これあき}茲明の活動が知られています。当時のカメラはまだ大きく、画像を写すには重くてかさばるガラス乾板を使用していました。茲明は大八車10台に荷物を乗せて従軍し、数多くの貴重な写真を撮影しました。

広島城では12月5日(土)から来年1月24日(日)まで、企画展「日清戦争と広島城」を開催します。その中で、ここで紹介した人たちについても展示しますので、ぜひ見に来てください。

(村上)



亀井茲明が撮影した従軍記者の記念写真。猛獣狩りにでも行くような格好をしています(財団法人亀井温故館蔵)

しろうや!

広島城

編集・発行
財団法人広島市文化財団
広島城

〒730-0011
広島市中区基町21-1
電話:082-221-7512
FAX:082-221-7519

平成21年12月18日発行

「しろうや!広島城」のバックナンバーは、広島城のホームページからダウンロードできます

広島城利用案内

開館時間:9:00~18:00
(12月~2月の平日は9:00~17:00)

入館の受付は閉館の30分前まで

入館料:大人360円(280円)

小人180円(100円)

()内は30名以上の団体料金

休館日:12月29日~1月2日

ホームページ <http://www.rijo-castle.jp>



携帯サイト